石巻専大付近の震災仮設住宅

収入確保・子どもと遊ぶ

「ベンチャービジネス」

石巻専修大学 経営学部 **山崎泰央ゼミ**

学生たち「つながり」を支援

石巻専修大学の経営学部・山崎泰央准教授（ベンチャービジネス論）が指導するゼミナールは、専門的な知識や技術を生かして大震災からの復興を支援している。

同ゼミは、これまで仮設住宅での▽収入支援▽コミュニティー・子ども支援▽交通支援――を展開してきた。

昨年3月11日の震災後、13人のゼミ生全員から「石巻のために何かしたい」という声が上がった。8月、石巻専修大学周辺の仮設住宅で生活実態調査を実施。

被災状況、就業状況、買い物の手段など30項目にわたって調査した結果、入居者の約6割が60歳以上、回答した4分の1が震災による失業者だった。収入源を年金や失業給付に頼る人も約6割――などの結果が出た。

また、「子どもの遊び場がない」「仮設住宅の周りは駐車場やがれき置き場になっており、危ないので外で遊ばせられない」「仮設住宅に入ったが知り合いがいない」などの声が多かった。

▲ 昨年夏、仮設住宅でアンケート調査をする山崎ゼミ生

▲ 山崎准教授（前列中央）と阿部さん（左）、佐藤さん（右）

学生たちは、調査結果から「被災者の収入を確保したい」「子どもたちに寄り添いたい」「子どもと遊ぶ支援活動をスタートした。「与える」支援ではなく「つながり」の支援だ。

同市のウエットスーツメーカーと協力し、スーツの端切れをペットボトルカバーなどに加工、その内職を仮設住宅の住民にあっせんしている。また、子どもと遊び、話を聴く活動をしている。

本年度は、新たにゼミ生9人を迎えた。

山崎准教授は「学生たちは新たに考えたエスコート・ランナーズ（自立までの道のりに寄り添う）というサービス・コンセプトのもと、自治会やNPOとの連携を深め、支援の幅を広げていく」と語る。

山崎ゼミ生の寄稿を紹介する。

寄稿

阿部 桂太（経営3）

宮城県 古川黎明高

「自分で稼いだこのお金は、一生大事にする」これは東日本大震災から1年が経ったある日に、お会いした女性お二人が私にかけてくれた言葉です。おふたりは震災後、南境地区の仮設住宅団地に入居しており、私たちが行っている支援活動の一つ「Mobby Side Line Project（収入支援）」に参加していただいた方々でした。

このプロジェクトでは地元企業と協力して、被災者に内職を紹介しています。昨年10月にスタートして以降、南境地区を中心に一時は10人前後までに規模を拡大しました。

しかし、春休みの2カ月間、活動が滞ってしまったこともあり、そのお二人は間もなく収入支援プロジェクトの参加を辞めていたそうです。

冒頭の言葉は、別件で団地に訪れた際、外出していたおふたりに偶然にも出会い、笑顔と共に伝えられました。お二人は、仕事で手に入れた数百円のお金を仏壇に供えるようにしているそうです。

▲ 学生たちに見守られアイロン作業をする

「収入支援」から――コミュニティー形成へ

今年度からは、子どもだけではなく、大人のコミュニティー形成にも取り組んでいます。

6月末、集会所で「足湯カフェ」を協力団体の手芸教室と合同で行いました。足湯とはいってもお湯を張ったたらいに足を入れて、マッサージをする簡単なものです。大人たちは手芸に夢中だったのですが、子どもたちが楽しんでいるのを見て「私もやりたい」と次々と参加してくれました。

終わった後、家に帰ったお母さんがわざわざ戻ってきて「おかげで足が軽くなりました。また来てね」と言ってくれました。

しかし、初めての試みだったので、お湯の交換を効率的にできなかった、ゆっくり話せるスペースはなかった、という課題もありました。問題点を改善し、よりよい足湯カフェにしていきたいと思っています。

今後は大学で、大人も子どもも集まれるプレイパークを企画・開催し、仮設住宅に住む人たちだけではなく、地域の人たちも一緒にコミュニティーづくりとその強化を目指していきます。

▲ 仮設住宅の子どもたちと遊ぶ

子どもたちの遊び相手に好評の「足湯カフェ」

昨年の8月に行った大学周辺の仮設住宅でのアンケートで「子供の遊び場がない」「近所付き合いがない」との声が上がりました。そこで、私たちが子どもの遊び相手になり、友だちづくりの手伝いをしようと考えました。仮設住宅の集会所で、月に2回、遊び場を作る活動を始めました。

昨年の10月から活動を始め、毎回10人前後の子どもたちが遊びに来てくれます。子どもたちのやりたいことを優先し一緒になって遊びます。はじめは子どもとどう遊べばいいのか分からなかったのですが、回を重ねるごとに徐々にうちとけてきました。

鬼ごっこ、ままごと、お絵かきのほか、画用紙で野菜などを作ってお店屋さんごっこをしたり、人形を作り人形劇をしたりと、子どもたちはいろいろと工夫して遊びを作り出します。

最近では、初めて来た子に対して「あの子初めて来た子だよね？　一緒に遊ぼうって言ってくるになって遊びます。はじめ」と自ら友だちを「作りに行く」光景も見られるようになりました。

佐藤 夏実（経営3）

福島県 福島南高